『敦煌寫本研究年報』第十一號（2017.03）109-133 頁

クチャ・クムトラ窟群區第50窟の千佛圖像について
——敦煌出土コータン語『賢劫經』との比較

荻原裕敏

一、導入

中國譯經史上に名高い鳩摩羅什が古代クチャ國の出身である事は改めて述べるまでもないが、この地域で如何なる佛教が行われていたかについては、クチャ國が西域北道の佛教の中心地であった事實に反して、十分に明らかにされているとは言い難い。前世紀初頭に現在の新疆ウイグル自治區各地で行われた各國の調査により發見された大量の寫本斷片及び現地の佛教遺跡に殘された壁畫・木工品などの考古學的遺物によって、漢籍史料に述べられている往時の繁栄を垣間見る事が可能になった。クチャ地域から齎されたこれらの資料は膨大な量に及び、未だに研究が完了しているわけではないが、現在までに明らかにされた範圍内では、クチャ佛教は部派佛教、とりわけ (根本) 說一切有部に屬していた事が窺え、この部派歸屬は漢籍史料の記載とも一致している[1]。

イスラム化以前のクチャ地域で話されていた言語はクチャ語と稱される印歐語に屬する言語で、クチャを中心に西のトゥムシュクから東のショルチュク・トルファンに至る西域北道全域から文獻資料が發見されている。現時點における研究成果によれば、これらの資料は 5 世紀前半-11 世紀前半に書かれたものとされており、インドに由來する佛教が中國へ傳わった時代から中國佛教が周邊地域に擴散した時代に相當しているため、佛教史研究において缺くべからざる資料と言う事ができる。これらの資料は、クチャ地域は歷史的背景からインド・イラン・中國などから影響を受ける一方、インドより佛教を受容した後は獨自の佛教を發展させ、周邊のトゥムシュク地域やソグド・古代ウイグルといった他民族の佛教に影響を與えるに至った事實を反映している。

[1]『大唐西域記』(T.51, no. 2087, 870a24-27) 及び『遊方記抄』(T.51, no. 2089, 979a26-29) を參照。

この言語で書かれた資料は大部分が紙文書或いは木簡といった文獻資料から成っているが、現地の佛教石窟の壁面に書かれた多くの銘文資料の存在も知られている。これらの銘文は紙文書や木簡とは異なり、何世代にもわたって書き繼がれる事がなく、書かれた當時の狀況を反映するという特性から、これらの銘文資料の解讀も重要な作業である事は言うまでもない。筆者は現在、クチャ地域に現存するブラーフミー文字銘文の總合的研究に從事しており[2]、本稿ではこれらの銘文の內、誓願圖と稱される佛教美術と關連するものを扱い、クチャ佛教における誓願圖の展開と關連づけて論じたい。

二、クチャ語文獻概說

本節では、本稿の內容に關連する範圍內でクチャ語文獻に關する情報を與える。前述のように、クチャ語は印歐語に屬する文獻言語であるが、東のショルチュク地域を中心にトルファンにかけて資料が發見されているトカラ語 A と稱される文獻言語と共に、所謂トカラ語派を形成する[3]。トカラ語文獻の上限及び下限年代は確定できないが、クチャ語については言語特徵や書寫に用いられるブラーフミー文字の文字特徵及び歷史的背景により 5 世紀前半から 11 世紀前半に書かれたものとされており、現在では言語特徵及び文字特徵に基づき、古代期・古典期・後期 (或いは口語) の三つの段階が區別される[4]。現在までに比定されているトカラ語文獻は、筆者の枠組みでは以下のように分類される。

[2] この研究は、新疆龜茲研究院・北京大學歷史系中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歷史語言研究所による「龜茲地區現存吐火羅語寫本與題記的調查與研究」というプロジェクトとして行っており、この三つの研究機關名義で發表している論文の他、筆者の名義で關連する研究成果を發表している。現在、最終的な報告書を準備中であるが、このプロジェクトの概要と研究成果については、榮 (2015) を參照。

[3] このため、言語學研究ではクチャ語はトカラ語 B と稱されるが、本稿では所謂トカラ語 A 竝びにトカラ語 B の總稱として「トカラ語」を使用し、トカラ語 B について言及する場合はクチャ語という名稱を使用する。なお、トカラ語 A と稱されてきた言語が、唐代の焉耆で口語としても使用されていたと推定される點については、Ogihara (2014a) を參照。

[4] この三つの段階の年代を確定する事も非常に困難であるが、概ね言語特徵の面からは、古代期 (4-6 世紀), 古典期 (5 世紀後半-6 世紀), 後期或いは口語 (7 世紀以降) に、一方文字特徵からは古代 (4-6 世紀), 古典期 (7 世紀), 後期 (8 世紀以降) と考えられている。言語特徵については Peyrot (2007: 204-206) を、また文字特徵については Malzahn (2008) 及び Tamai (2011) を參照。この內、紀年の記載を有する世俗文書及び銘文のみが年代を確定する事が可能で、慶 (2013) の編年に從えば、大部分の世俗文書は 8 世紀に比定されるが、7 世紀前半のものも存在する。

[1]: 阿含經
[2]: 律藏
[3]: 論藏
[4]: Udānavarga 關連佛典
[5]: 比喩譚・本生譚・佛傳
[6]: Buddhastotra
[7]: 佛教劇
[8]: 醫學文獻
[9]: 懺悔文獻
[10]: 呪術文獻
[11]: 銘文 (以下では「題記」とする)
[12]: 世俗文書
[13]: マニ教文獻 (クチャ語のみに在證)

これらのトカラ語佛典が反映する點をまとめると、部派歸屬は (根本) 說一切有部であり、佛教術語は梵語などのインド語に由來する借用語が大半で、漢語からの佛教術語はほぼ皆無であるだけでなく、漢譯佛典を原典とするトカラ語佛典は未確認である事から、當時西域北道における佛教はインド佛教の强い影響下にあった事を窺う事ができる。

三、クチャ・クムトラ窟群區第50窟の壁畫及びクチャ語題記について

クチャ地域に現存するブラーフミー文字題記は、キジル・クムトラ・スバシ・キジルガハ・シムシム・マザルバハ・イシャック石窟に存在が確認されており、その大部分を占めるのは古代クチャ國の言語であったクチャ語によるものであるが、この他に梵語・古代ウイグル語・トゥムシュク語の題記も少數ながら確認されている。本稿ではこの內のクムトラ窟群區第 50 窟に現存するクチャ語題記を中心に扱う。

この石窟は中心柱窟と稱される類型の石窟で、現在は主室のみが殘り、廣さは約 3 × 4m、高さは約 3m である。開削年代は不明で、2011-2012 年に修復されているが、破損部分の補修のみで、壁畫に變化は見られない。正壁上部には佛龕が穿たれているが、佛像は現存していない[5]。この石窟の壁面は正壁上部の佛龕も含めて、壁畫を描くために一面が格子狀に仕切られた上で、そのそれぞれに佛陀を中心とし、その右側或いは左側に跪き、佛陀に何らかの供養を行っていると見られる人物の壁畫が描かれている。壁畫の上部には白いカルトゥーシュがあり、現在は剝落・退色のため部分的にしか殘存していないが、本來は全ての壁畫に對して墨書のブラーフミー文字によるクチャ語題記が附されていたと推定される[6]。現

[5]この石窟の詳細については、新疆龜茲石窟研究所 (2008a: 185-188) 及び新疆龜茲研究院・北京大學歷史系中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歷史語言研究所 (2015: 16-17) などを參照。

[6]この石窟の圖版としては、新疆維吾爾自治區文物管理委員會・庫車縣文物保管所・北京大學考

存する壁畫の量は非常に多く、この石窟に込められた思想を理解するためにはこれらの壁畫の解明が重要である事が早くから認識されており、從來中國で出版された圖錄などではこの壁畫は因緣故事と說明されてきたが、寥 (2012: 218-223) は壁畫のモチーフを根據に誓願圖であるとしている。ただし、これらの推定は壁畫に附されたクチャ語題記を參照していないため、題記との比較研究による再解釋が必要とされていた。

幸いにして筆者は 2011 年と 2013 年の二度にわたりこの石窟の現地調査を行う機會を得る事ができ、現存するクチャ語題記の解讀を試みた。前述の通り、これらのクチャ語題記はその殆どが剝落・退色により部分的に殘存するのみであるが、正壁上部の佛龕に書かれた題記のみは他の壁面のものと比較して格段に狀態が良く、特定の壁畫に附された題記全體を解釋する事が可能なものも存在しており、この石窟に描かれた壁畫理解に決定的な手がかりを提供する。この佛龕については脚註 5 で言及した文獻に讓りたいが、基本的な情報として、佛龕に備えられていたと推定される佛像は失われており、下部は修復濟みである。高さは約 176cm、廣さはほぼ 1m 四方のもので、內部は左右それぞれが 7 段に仕切られており、各段 4 幅の壁畫が描かれている事から、合計 56 幅の壁畫が存在していたと推定されるが、部分的に現存するものも含めて壁畫は 42 幅、また 44 幅のカルトゥーシュにクチャ語の題記が殘されている。

この佛龕に書かれたクチャ語題記全體の解讀については、新疆龜茲研究院・北京大學歷史系中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歷史語言研究所 (2015) で扱ったが、これらのクチャ語題記の解讀により、この石窟の壁畫に描かれていたのは因緣故事ではなく、誓願圖である可能性が高い事が明らかになった。これらの題記の個々の內容の檢討は本稿の主題ではないため、ここでは一つだけ引用しておく。

> Km-050-KN-R-01.01
> *[U]grat[e]je pärw(e)ṣṣe pañäktäññe perneś palsko ersate ñkañcai pātrai wasa.*
> 「Ugratejas は初果に對して發心し、銀の鉢を捧げた。」

解讀可能な範圍內では、この石窟のカルトゥーシュに書かれたクチャ語題記は上に引用した構文を取り、基本的には佛陀に對して供養を行う者の名前と供養の

古系 (1992: 圖版 125-133)、中國壁畫全集編輯委員會編 (1995: 圖版 95-109) 及び新疆維吾爾自治區博物館・新疆人民出版社 (1997: 圖版 96-102) などを參照。

内容が異なっているに過ぎない。また、これらの題記には古代期のクチャ語の要素は見られず、7-8 世紀頃のものと考えられる。

描かれた壁畫の分析のみからは誓願圖と確定する事は困難であるが、誓願圖に關連すると見られるクチャ語斷片に、以下に擧げるような本石窟のクチャ語題記と同様の記述が見られる事から、この石窟に描かれた壁畫を誓願圖と見做し得ると考えられる[7]。

B398 (= THT398) b3: /// *vyā[k](ar)i(t)* ///
「[…] 授記 […]」
B398 (= THT398) b5: /// *(pañä)ktäṃñe perneś palsk(w) ersatai*
「[…] あなたは佛果に對して發心した。」

この二つの記述は、本稿で檢討している題記と同じくクムトラ石窟發見とされるドイツ所藏のクチャ語斷片からの引用であるが、同じ寫本に屬すると考えられる斷片としてもう一點 B399 (= THT399) の存在が知られており、*TochSprR(B)* II: 264-266 で轉寫が出版されている。この二斷片はこれまで現代語に譯された事はないが、この二斷片に對する *TochSprR(B)* II: 264-265 の說明では誓願に關係する內容を有するとされ、ベゼクリク第 20 窟誓願圖との關連が指摘されている。上の引用から窺えるように、この二斷片を仔細に檢討すると、誓願だけでなく、授記にも言及している點は注意されるべきであり、他にも「第二の阿僧祇」「寶髻佛」「彼は授記を得た」という記述が見られる事から、この二斷片は誓願と授記の雙方に關連すると見るべきである[8]。この點から、クムトラ窟群區第 50 窟に描かれた壁畫は、壁畫の說明のために附されたクチャ語題記から、誓願圖であった可能性が高いと考えられる。

ここで注目すべきは、クチャ語題記で言及される供養者の名前である。管見の限りでは、これらの供養者の名前は *Rāhu* 及び *Supriya* を除いて、トカラ語資料には在證されないものであり、既知のトカラ語佛典との比較を行う事ができず、これらの題記が有する佛教史的意義の解明には別系統の資料を檢討する事が必要となるが、筆者の調査によって、これらの名前はコータン語譯『賢劫經』及び漢譯『現在賢劫千佛經』等に在證される事が明らかになった。この事實は、これらの供養者が現實に存在していた人物を前提としたものではなく、千佛名である事を示

[7] この二點のクチャ語斷片については、荻原 (2016a: 273 註 4) を參照。
[8] まとまった分量の文脈を回收する事はできないが、現存する內容から、この二斷片は以下の第五節で言及する『根本說一切有部律藥事』の系統と關連づけられるかも知れない。

している。以下、當該のクチャ語題記を佛教史の觀點から位置づけるため、これらの供養者として書かれた千佛名と關連資料との比較を行いたい。

四、クチャ語題記に言及される千佛名及び題記による壁畫配列の推定

前節ではクムトラ窟群區第 50 窟に描かれた壁畫とそれに附されたクチャ語題記から、これらの壁畫が因緣故事ではなく、誓願圖と考え得ると共に、クチャ語題記に見られる供養者名が既知のトカラ語文獻には殆ど在證されない特別なものであり、コータン語譯『賢劫經』及び漢譯『現在賢劫千佛經』等といった資料に在證される事から、千佛名と判斷される點に言及した。本節では、これらの千佛名と關連文獻との比較によって、當該の石窟に見られるクチャ語題記の佛教史的位置づけ及びこの石窟に描かれた壁畫の解明に對して有する意義について檢討する。

この窟のクチャ語題記で最も狀態が良く、連續した文脈を回收できるのは佛龕に書かれた部分である事は既に言及した。前述のように佛龕には合計 56 幅の壁畫が存在していたと推定され、部分的に現存するものも含めて壁畫は 42 幅、また 44 幅のカルトゥーシュにクチャ語の題記を讀み取る事ができる。この 44 幅のカルトゥーシュに見られる題記の內、38 幅の題記に供養者名が殘存している。これらの千佛名と比較可能な文獻として、本稿では以下の資料を利用する。

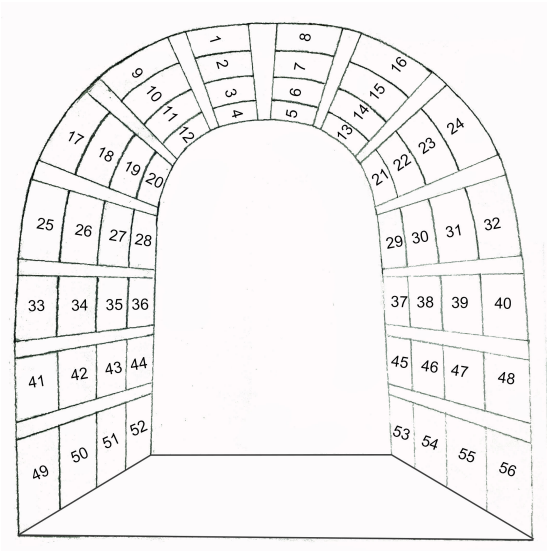
(a): Weller (1928):『賢劫千佛號』
『現在賢劫千佛經』 (T.447a = A)
『現在賢劫千佛經』 (T.447b = B)

(b): コータン語『賢劫經』[9]
(Ch. c.001 = IOL Khot S. 46, ll. 199-754; Bailey 1951: 76-90; 1981: 76-90; Catalogue: 542)

前者の Weller (1928) が扱う『賢劫千佛號』は 1774 年に出版された文獻で、梵・漢・藏・蒙・滿語の合壁資料であり、この文獻の他に梁代に漢譯されたと傳えられる二種の『現在賢劫千佛經』という經名を持つ漢譯佛典を參照し、比較對照研究を行っている。一方、10 世紀中葉の成立とされる敦煌發見のコータン語『賢劫經』は田久保 (1975) によると、六つのテクストを一つにまとめた儀禮用の文獻の

[9]Emmerick (1978: 254) はこの文獻の成立年代を 967 年とし、Catalogue (p. lxix) は 943 年とする。一方、田久保 (1975: 38) は 8 世紀末とするが、ここでは前者の說を採用した。なお、この文獻については、Maggi (2009: 384) を參照。

一部であり、その内の 199-754 行目が『賢劫經』に相當する。本稿の附表一 (荻原 2015a: 40-42 より轉載) は、これらの文獻の内、Weller (1928) の梵語部分 (= W.) 及び二種の『現在賢劫千佛經』 (T.447a = A; T.447b = B) 竝びにコータン語『賢劫經』の佛名 (= Kh.) を、第 50 窟正壁の佛龕に書かれたクチャ語題記に在證される佛名と比較したものである [10]。



この表から明らかなように、これらはクチャ語題記と完全には一致せず、各項目には全て一致するものやコータン語とのみ一致するもの、或いはクチャ語のみに見られるものが存在しているが、クチャ語題記は、特にコータン語『賢劫經』及び漢譯『現在賢劫千佛經』(A) と順序や語形が良く一致している事が窺える。そして、この一致に基づき、第 50 窟正壁の佛龕に描かれた壁畫の配列を確定する事が可能であり、その結果を示すと、左圖 (荻原 2015a: 38 より轉載・慶昭蓉による作圖) のようになる。

また、この二つの文獻との一致を利用し、部分的に殘存する他の壁面に書かれた題記に見える佛名を基に、當該石窟全體の壁畫の配列を推定する事ができる。各壁面のクチャ語題記に殘存する佛名を Weller (*op.cit.*) で與えられた番號と對照すると、下記の番號のものが在證される。

主室右側壁: 344, 350, 365, 410 (= Kh.: 397, 389, 392, 394, 395, 399, 422, 425)[11]
主室正壁: 不明
主室正壁佛龕: 473-528 (= Kh.: 453-481)
後甬道: 569, 602, 629, 579, 706 (= Kh.: 502, 518, 570)
主室左側壁: 不明
主室前壁: 不明

[10]表中の右側壁・左側壁とは、佛龕から向かって右・左を指し、門道を基準にしていない。また、各文獻に在證される佛名の後に記した數字は Weller (*op.cit.*) における番號であり、番號に附した下線は各文獻において連續して現れる事を示している。

[11]主室右側壁第 9 欄第 8 幅の壁畫には法輪のみが描かれ、佛名を記さない題記が見られる。これは*Śākyamuni* を指すものと推定されるが、假にこの推定に誤りがなければ、*Śākyamuni* を四番目に置く Weller (*op.cit.*) 及びコータン語『賢劫經』とは全く異なる事となるが、意圖的にこの場所に移されたのか、或いは基づいた版本の相違によるものかを明らかにできない。

主室正壁及び左側壁は確定可能な佛名が確認されないが、キジル第 110 窟などの壁画の配列を考慮すると [12]、クムトラ窟群區第 50 窟に描かれた壁畫の配列は、主室右側壁 → 主室正壁 → 主室正壁佛龕 → 後甬道 → 主室左側壁と推定される。ただし、主室前壁については、最初か最後のどちらであるかを推定できない。なお、正壁佛龕で言及される佛名が、ほぼ中間に位置する佛名である點は注意されるべきであり、この石窟の構造から見て、千佛の全てが描かれていた可能性が指摘される [13]。

また、クムトラ窟群區第 50 窟のクチャ語題記が、特にコータン語『賢劫經』及び漢譯『現在賢劫千佛經』(A) と順序や語形が良く一致している點は、これら三つの佛名が同じ系統に屬する事を示している。Weller (*op.cit.*) で扱われた各種の文獻に加えて、西夏語譯竝びにコータン語譯を加え、『佛名經』の系統を整理した井ノ口 (1960: 618) によれば、コータン語『賢劫經』及び漢譯『現在賢劫千佛經』(A) は同一の系統に屬し、同氏が S_6 と呼ぶ祖形に遡る一方、Weller (*op.cit.*) が扱う『賢劫千佛號』及び漢譯『現在賢劫千佛經』(B) の共通の祖形である α とは系統が異なっており、この系譜に從えば、當該石窟のクチャ語題記が言及する佛名も前者 S_6 の系統に屬する事となる。

五、クチャ佛教における佛名の傳統と誓願圖

前節ではクムトラ窟群區第 50 窟の題記に言及される佛名が漢譯『現在賢劫千佛經』竝びにコータン語『賢劫經』のものと非常に良く一致する事から、共通の祖形に遡り得る點を指摘した。では、このような佛名はクチャ佛教ではどのように位置づけられるであろうか。『現在賢劫千佛經』が中國で漢譯された年代が 6 世紀前半であるならば、インドと中國の中間に位置するクチャにも東漸の過程で傳わっていたと考えられる。管見の限り、この佛名に關連するクチャ語斷片は存在しないが、同系統の佛名が 5-6 世紀にはクチャに傳わっていた事を示す梵語斷片が二點知られている。この二點の梵語斷片はドイツ所藏のキジル發見とされるもので、現在 SHT840 及び SHT840a という所藏番號を有し、それぞれ Kh. = 493-542, A = 517-563, B = 522-566 及び Kh. = 170-219, A = 193-243, B = 197-242 に對應する佛名に言及する [14]。また、この二斷片の書寫に使用されているブラーフミー文字の

[12] キジル第 110 窟の配列については、中川原 (1994) を參照。

[13] この石窟に千佛が全て描かれていたとするならば、主室前壁は冒頭の部分に相當していたと思われる。

[14] この二點の斷片の轉寫については *SHT* III: 79-82 を參照。なお、ここで示した對應箇所は同書での記述に基づいている。

類型は、Sander (1968) で提出されている枠組みの内、Early Turkestan Brāhmī Type 1 と稱される類型に屬し、Sander (2005) ではこの類型のブラーフミー文字は 5-6 世紀に設定されているため、この系統に屬する佛名はクチャ佛教では 5-6 世紀まで遡る事となる。殘念ながら、この二斷片に在證される佛名はクムトラ窟群區第 50 窟のクチャ語題記のものとは重ならず、直接の比較を行う事はできないが、二本の漢譯『現在賢劫千佛經』及びコータン語『賢劫經』のものと比較すると、いずれとも一致せず相違が認められる一方、漢譯『現在賢劫千佛經』(A) 及びコータン語『賢劫經』、とりわけ後者に近い關係にある事が窺えるため、クムトラ窟群區第 50 窟のクチャ語題記と同様の系統或いは非常に近い系統に屬し、共通の S_6 と稱される祖形に遡るものと推定される。

この推定が正しければ、誓願圖と密接な關連を持つ佛名が 5-6 世紀にはクチャ佛教に傳えられていた事となるが、一方の誓願圖の傳統はどの時代まで遡る事ができるだろうか。この問題について、佛教美術史研究からは確定した說が提出されていないようであるが、この問題に手がかりを與える可能性のある壁畫がエルミタージュ美術館に所藏されている。この壁畫は КУ-614 という所藏番號の壁畫で、圖版はエルミタージュ美術館 (2008: 129) 及び新疆龜茲石窟研究所 (2008b: 123 圖版 28) で出版されており、壁畫上部に殘されたカルトゥーシュにわずかながらブラーフミー文字が書かれていることが窺える。出版されている圖版からこの題記の讀みを確定する事は困難であるが、筆者は 2015 年にこの壁畫の調査をエルミタージュ美術館で行った。エルミタージュ美術館の當該の壁畫に對する說明では、この壁畫はクムトラから將來されたとされ、6 世紀に比定されている。筆者の解讀の結果は荻原 (2015b: 36) で紹介したが、*/// (pañä)ktäññ[eṣ]c(a) ///*「[…] 佛果に對して […]」と解讀される。

この壁畫に附されたエルミタージュ美術館のタイトルは、佛陀說法圖となっている。しかしながら、この題記にはクチャ語の單語 *pañäktäññe*「佛果」の向格形が讀み取れるだけではあるが、目標・目的を表すこの語形は、本稿で扱っているクムトラ窟群區第 50 窟の壁畫に附されたクチャ語題記にも使用されている事から、この壁畫は佛陀說法圖ではなく、誓願圖に比定される可能性を指摘する事ができる。また、この題記で用いられているブラーフミー文字及び言語特徵は古代期のものを反映し、5-6 世紀に書かれたものと考えられる [15]。荻原 (2013) で指摘したように、管見の限り、クチャ地域の石窟に由來する古代期のクチャ語題記は遊人

[15]エルミタージュ美術館所藏のクチャ語題記を伴った壁畫が第一樣式に、一方クムトラ窟群區第 50 窟の壁畫は第二樣式に分類される點を、檜山智美博士にご教示頂いた。ここに記して、お禮申し上げる。

題記と稱される石窟への禮拜を記念したものや韻文などに限られており、壁畫の説明のために附された傍題は知られておらず、假にこの壁畫を誓願圖とする筆者の推定が正しいならば、クチャ地域において誓願圖の傳統は少なくとも 5-6 世紀まで遡ると見做す事ができる。

一方、クチャ地域の石窟には佛名に言及するクチャ語題記を伴った誓願圖が他にも知られているが、それらは本稿で扱っているクムトラ窟群區第 50 窟の題記で言及される系統の佛名ではなく、『根本說一切有部律藥事』に言及されるものであり、別の系統に屬していると言える。例えば、同じくクムトラ窟群區第 34 窟には誓願圖が四方の壁一面に描かれており、全ての壁畫にクチャ語題記が附されていたと見られるが、現在は最上段の大部分とその他の段に書かれた一部が殘存するのみである [16]。この石窟に現存する解讀可能なクチャ語題記は新疆龜茲研究院・北京大學歷史系中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歷史語言研究所 (2014a) で扱ったが、附表二 (荻原 2014b: 39-42 より轉載) から明らかなように、右側壁最上段の題記で言及される過去佛は、順序に若干の相違を示しながらも基本的には『根本說一切有部律藥事』に語られているものと一致する。また、興味深い事に、『根本說一切有部律藥事』の韻文で語られる過去佛のリストとも言える內容を有するトカラ語斷片が二點 (恐らくはクチャ發見のイギリス所藏クチャ語斷片 IOL Toch 128 及びショルチュク發見のドイツ所藏トカラ語 A 斷片 A256 = THT889) 知られており、荻原 (2014b) で明らかにしたように、これらは相互に若干の相違を示しながらも、同一の系統に屬すると見做す事ができる (附表二參照)[17]。これらの資料は、クチャ地域の誓願圖が、少なくとも『現在賢劫千佛經』及び『根本說一切有部律藥事』という二つの異なる系統の過去佛と結びついていた可能性を窺わせる [18]。

なお、トゥルファン・ベゼクリク石窟に誓願圖が見られる事はよく知られているが、近年の佛教美術史研究ではベゼクリクの誓願圖はクチャ地域の誓願圖に由來する事が指摘されている。また、ベゼクリク石窟第 20 窟の誓願圖にはそれぞれ

[16] この石窟の圖版としては、中國壁畫全集編輯委員會編 (1995: 圖版 121-129) 及び新疆維吾爾自治區博物館・新疆人民出版社 (1997: 圖版 55-62) などを參照。

[17] 『根本說一切有部律藥事』中の關連部分については、八尾 (2013: 441-454) を參照。

[18] ドイツ探檢隊によってベルリンに持ち去られたシムシム石窟第 40 窟主室の壁畫にはクチャ語題記が書かれており、Schmidt (2008) の解讀によれば、これらの壁畫も誓願圖と見做されるが、題記に言及される佛名は『現在賢劫千佛經』及び『根本說一切有部律藥事』のいずれとも一致せず、その內の一つの佛名が『根本說一切有部律藥事』に見えるのみである。ただし、題記に言及される一部の物語は『根本說一切有部律藥事』との共通性を示している事から、(根本) 說一切有部の系統に屬すると見られる。この點については、新疆龜茲研究院・北京大學歷史系中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歷史語言研究所 (2014b: 46-48) を參照。なお、この石窟の壁畫は新疆龜茲石窟研究所 (2008b: 24) によれば、壁畫の特徵からウイグル期のものであり、年代は 9 世紀頃とされている。

梵語による題記が附されており[19]、村上 (1984) が體系的に明らかにしたように、この題記に言及される過去佛は後者の『根本說一切有部律藥事』の系統に屬する。興味深い事に、ベゼクリク石窟第 20 窟誓願圖の第 5 面中央に位置する佛陀の右足に跪く比丘に附されたブラーフミー文字題記は、トカラ語である可能性が指摘されるだけでなく、『根本說一切有部律藥事』に«Nandīpālasūtra»として引用され、同窟第 10 面の誓願圖の主題となっている佛典は、誓願と授記の兩方に言及するという點において、ドイツ所藏クチャ語斷片 B384 (= THT384) のみがベゼクリク石窟第 20 窟誓願圖との共通點を有する[20]。これらの點は、トカラ語文獻研究からもクチャ佛教とベゼクリク石窟の誓願圖との關連を示唆するものと言えよう。

結論

本稿ではクムトラ窟群區第 50 窟主室正壁佛龕の壁畫に附されたクチャ語題記の解讀を通して、これらの壁畫が誓願圖と見做される可能性が高い點を指摘すると共に、これらの題記で言及される過去佛が漢譯『現在賢劫千佛經』竝びに敦煌發見のコータン語『賢劫經』のものと最もよく一致する點を根據に、當該石窟に描かれた壁畫の配列を推定した。また、これらの佛名は同一の系統に由來すると考えられるだけでなく、5-6 世紀のものと推定されるクチャ・キジル出土の二點の梵語斷片も同樣の系統の佛名を傳えている事から、少なくとも 5-6 世紀にはこの系統に屬する佛名がクチャ地域に傳えられていたと考えられる點にも言及した。一方、誓願圖との關係から見れば、クムトラ窟群區第 34 窟には『根本說一切有部律藥事』の系統の過去佛と結びつく誓願圖も知られているため、クチャ地域の誓願圖は少なくとも『現在賢劫千佛經』及び『根本說一切有部律藥事』という二つの異なる系統の過去佛と結びついていた可能性を窺わせる。

なお、これら二つの系統の佛名がいつ頃まで遡るかについては、『現在賢劫千佛經』の系統は前述の二點の梵語斷片から 5-6 世紀まで、もう一方の『根本說一切有部律藥事』の系統はイギリス所藏クチャ語斷片 IOL Toch 128 及びクムトラ窟群區第 34 窟のクチャ語題記から 7-8 世紀頃と推定されるが、資料が決定的に不足しており、上限年代を確定できない。

また、クチャ地域のこの二系統の佛名の內、『根本說一切有部律藥事』の系統は、

[19]ベゼクリク石窟第 20 窟及び同窟の誓願圖竝びにその教義的・歷史的背景については、村上 (1984)、Konczak (2013)、橘堂 (2013) 及び森 (2015) などを參照。また、當該石窟の誓願圖の圖版としては Le Coq (1913) を參照。

[20]ここで言及したベゼクリク石窟とトカラ語文獻との關連については、荻原 (2016b, 2016c) を參照。

11-12 世紀に比定されるトゥルファン・ベゼクリク石窟第 20 窟の誓願圖にも確認されるが、『現在賢劫千佛經』の佛名についてはその後の西域北道の佛教美術では迹を辿る事ができず、10 世紀中葉の敦煌發見コータン語『賢劫經』と言った出土文獻資料に在證されるに過ぎない。

以上の考察の結果、今後の課題として西域北道全體に廣がる誓願圖を敦煌の石窟も視野に入れて再檢討する必要性が指摘される。敦煌莫高窟の早期窟には、クムトラ窟群區第 50 窟と同樣に『佛名經』に見られる漢譯の佛名が記された傍題を伴った千佛圖の存在が知られており [21]、これらの石窟との比較研究が爲されるべきである。また、クチャ地域における誓願圖の成立と佛名の傳播の關係についても、インドから中國への佛名經類の傳播と關連づけて檢討される必要がある。

一方、文獻研究の觀點からは井ノ口による研究が存在するとは言え、コータン語『賢劫經』に見られる佛名は、クチャ・キジル出土の 5-6 世紀のものと推定される二點の梵語斷片と同一系統に屬すると見られる事やクムトラ窟群區第 50 窟のクチャ語題記と言った新しい資料が追加された事から、コータン語『賢劫經』の成立背景を西域北道の佛教も視野に入れて再檢討すると共に [22]、漢語に飜譯されたものも含め、佛名經類の成立と展開の全體像を明らかにする必要がある [23]。

[21] これらの石窟に描かれた壁畫の配色パターンや壁面構成竝びに傍題に書かれた千佛名との關係については、末森 (2016) を參照。なお、本論文をご提供下さった末森薫博士に篤く感謝申し上げる。

[22] 管見の限り、コータン語『賢劫經』を扱った論考の中で、この二點の梵語斷片に言及したものは見當たらない。

[23] コータン語『賢劫經』に在證される佛名がガンダーラ語の特徵を反映している點は Bailey (1946: 775-778) によって指摘されているが、キジル出土の二點の梵語斷片が同系統の佛名を傳えている點は、この文獻に反映される佛名の傳承が 10 世紀中葉に成立したものではなく、少なくとも 5-6 世紀にまで遡る事を示しているだけでなく、この佛名は敦煌の傳承ではなく、クチャを中心とする西域北道に流布していた (根本) 說一切有部の傳承を受容した可能性を示唆する。一方、本稿の元となった筆者の發表 (2016 年 8 月 6 日於京都大學人文科學研究所) の際、このコータン語の佛名はむしろ西北インドの (根本) 說一切有部の傳承を反映しているのではないかとのコメントを吉田豐教授から賜った。ここに記して、特にお禮申し上げる。なお、少數ではあるが、敦煌からはクチャ語斷片が發見されている。

附表一：クムトラ窟群區第 50 窟主室正壁佛龕佛名對照表（括弧内の数字は當該文獻中の順序を、---は對應する佛名が見られない事を示す）

クチャ語	コータン語、梵語及び漢訳	クチャ語	コータン語、梵語及び漢訳
頂部右		頂部左	
1. *Nāgapprabhe*	Kh. *Nāgaprrabhau* (299) W. --- AB. ---	1. 缺落	
1. *Ratnasvare*	Kh. *Ratnasvarau* (453) W. *Ratnaruta* (474) A. 寶音 (473) B. 寶音 (474)		
2. *Ugravikrame*	Kh. ---; W. ---	2. 缺落	
2. *Vajrasene*	Kh. *Vajrrasenau* (453, 490, 589) W. *Vajrasena* (247, 475, 523, 545) A. 金剛軍 (246, 474) B. 金剛軍 (247)		
3. *Anaṃtateje* (?)	Kh. *Anaṃtatejau* (336, 554) W. *Anantatejas* (238, 674) A. 無邊威德 (237)、無邊德(673) B. 無邊威德 (238)、無邊德 (674)	3. *Prasaṃnabuddhi*	Kh. *Prasaṃnabuddhau* (456) W. *Prasannabuddhi* (480) A. 淨意 (480) B. 淨意 (480)
4. *Bhavantadarśiṃ*	Kh. *Bhavātadarśau* (283, 352) W. *Bhavātadarśin* (126, 270) A. 見有邊 (126, 270) B. 見有邊 (126)	4. *Jñākeme*	Kh. ---; W. ---

4. *Siṃhabale* (?)	Kh. *Sihabalo* (454) W. *Siṃhabala* (477, 780) A. 獅子力 (476), 師子力 (779) B. 獅子力 (477)		
右側壁第 1 排		左側壁第 1 排	
1. *Ugrateje*	Kh. *Ugratejau* (379, 457) W. *Ugratejas* (325, 482) A. 威德猛 (326)、猛威德 (482) B. 威德猛 (325)、猛威德 (482)	1. 缺落	
2. *Mahāraśmi*	Kh. *Mahāraśmau* (406, 457) W. *Mahāraśmi* (402, 471, 483) A. 大光 (403) B. ---	2. 缺落	
3. 缺落		3. *Candraprabhe*	Kh. *Candrrauprrabhau* (460) W. *Candraprabha* (489) A. 月光 (489) B. 月光 (489)
4. *Vimalagarbhe*	Kh. *Vimalagarbhau* (458) W. *Vimalagarbha* (485) A. 淨藏 (485) B. 淨藏 (485)	4. *Dyutiddhare*	Kh. *Jutiddharau* (461) W. *Vidyādhara* (490) A. 持明 (490) B. 持明 (490)
右側壁第 2 排		左側壁第 2 排	
1. *Praśantagāmi*	Kh. *Prraśāṃtagāmī* (461)	1. *Laḍhitakṣetre* (?)	Kh. *Laḍhitakṣetrau* (463)

	W. *Praśāntagāmin* (491, 879) A. 善寂行 (491)、至寂滅 (879) B. 善寂行 (491)		W. *Laḍhitakṣetra* (495) A. 嚴土 (495) B. 嚴土 (495)
2. *Akṣobhye*	Kh. *Akṣubhyau* (462) W. *Akṣobhya* (492) A. 不動 (492) B. 不動 (492)	2. *Vyūharāje* (?)	Kh. *Viyūharājau* (464) W. *Vyūharāja* (496) A. 莊嚴王 (496) B. 莊嚴王 (496)
3. *Rāhu*	Kh. *Rāhau* (569) W. --- AB. ---	3. *Atyudgate*	Kh. *Atyudgatau* (464) W. *Abhyudgata* (497) A. 高出 (497) B. 高出 (497)
4. *Guṇavarme*	Kh. *Guṇadharmau* (463) W. *Guṇavarman* (494) A. 德法 (494) B. 德法 (494)	4. *Hutārci*	Kh. *Hudārcau* (465, 692) W. *Hutārci* (498, 951) A. --- B. ---
右側壁第 3 排		左側壁第 3 排	
1. *Padumaśri* (?)	Kh. *Padumaśirau* (465) W. *Padmaśrī* (499) A. 花德 (499) B. 蓮華德 (499)	1. *Sumeddhase*	Kh. *Sumedau* (393, 467) W. *Sumedhas* (353, 503) A. 利惠 (353), 利慧 (503) B. 利慧 (353)
2. *Ratanavyūhe*	Kh. *Ratnaviyuhau* (466) W. *Ratanavyūha* (500) A. 寶嚴 (500)	2. *Samutradatte*	Kh. *Samudrradaptau* (468) W. *Samudradatta* (505) A. 海德 (504)

	B. 寶嚴 (500)		B. 海德 (505)
3. *Subhadre*	Kh. *Subhadrrau* (466) W. *Subhadra* (502, 788) A. 上善 (501) B. 上善 (502)	3. *Brahmaketu*	Kh. *Brrāhmaketau* (468) W. *Brahmaketu* (396, 506) A. 梵相 (397, 505) B. 梵相 (396)
4. *Ratanottame*	Kh. *Ratnautamau* (467, 609) W. *Ratanottama* (386, 503) A. 寶上 (502) B. 寶上 (503)	4. *Somacchattre*	Kh. *Saumacchatrau* (469) W. *Somacchattra* (507) A. 月蓋 (506) B. 月蓋 (507)
右側壁第 4 排		左側壁第 4 排	
1. 缺落		1. *Pūrṇacandre*	Kh. *Purṇacaṃdrau* (472)[1] W. *Pūrṇacandra* (514) A. 滿月 (513) B. 滿月 (514)
2. *Jñānakirti*	Kh. *Jñānakīrtau* (470, 488) W. *Jñānakīrti* (510) A. 智稱 (509) B. 智稱 (510)	2. *Padumaraśmi*	Kh. *Padmaraśmau* (473) W. *Padmaraśmi* (515) A. 花光 (514) B. ---
3. *Supriye*	Kh. --- W. *Supriya* (887) A. 善喜 (887) B. 善喜 (887)	3. *Saṃvrätte*	Kh. *Saṃvṛtau* (473) W. *Suvrata* (516)[2] A. --- B. ---
4. *Śīlaprabhe* (?)	Kh. *Śīlaprabhau* (647)	4. 缺落	

	W. *Śīlaprabha* (861) A. 戒明 (861) B. 戒明 (861)		
右側壁第 5 排		左側壁第 5 排	
1. 欠落		1. 欠落	
2. *Raśmirāje*	Kh. *Raśmirājau* (475) W. *Raśmirāja* (519)(3) A. 光王 (518) B. ---	2. 欠落	
3. 欠落		3. 欠落	
4. 欠落		4. 欠落	
右側壁第 6 排		左側壁第 6 排	
1. 欠落		1. 欠落	
2. 欠落		2. 欠落	
3. *Sārathi* (?)	Kh. *Sārathau* (365, 481) W. *Sārathi* (69, 296, 531) A. 妙御 (69)、調御 (295, 530) B. 妙御 (69)、調御 (296)	3. 欠落	
4. 欠落		4. 欠落	

(1): ここでは黄振華「敦煌所出于闐文千佛名經校釋」110、173 頁が掲げる *Purṇacaṃdrau* を採用した。

(2): Weller (1928) は梵語形式を *Suvratarāja* とするが、漢訳 A 本「善成王」及び B 本「善戒王」に對應する。

(3): Weller (1928) 所引梵本は第 519 番目の佛名として *Mahāraśmirāja* (漢訳「大焔王」に對應) も入れているが、ここではクチャ語及びコータン語との對應關係を考慮に入れて、*Raśmirāja* を對應する梵語形式とする。

附表二：佛名對照表

藥事藏譯[1]	藥事漢譯[1]	A256	IOL Toch 128	Km 34	B400	DKPAM	B74	NS 32	Bez
第一阿僧企耶									
Śākyamuni	釋迦								
Kauṇḍinya	憍陳		1. **Kauṇḍinye*[2]		1.	(2.)		(6.)	
Aparājita	無勝		2. *Aparacite*		3.	3.			
Ratnaśikhin	寶髻	1. *Ratnaśśīkhi*	3. *Ratnaśśikhi*	4. *Ratnaśikhi*	2.	5.			9.
Kṣemaṅkara	安隱	(8. *Kṣemaṅgare*[3])	(10. *Kṣemaṅgare*[3])	6. *Ṣemaṅkar*	4.	(13.)	(1.)		
**Praṇāda*[4]	佛	2. *Praṇāte*	4. *Praṇāte*	5. *Praṇāde*		6.			
**Śrīsambhava*[5]	有勝	3. *Śrīsambhave*	5. *Śrisambhave*	7. *Śrīsambhave*			7.		
Hiteṣin	利益	45. *Hītaiṣi*				4.	6.		
Kauṇḍinya	憍陳	4. *Kauṇḍinye*	6. *Kauṇḍinye*	8. *Kauṇḍinye*		(2.)		(6.)	
Sudarśana	樂見	5. *Sudarśane*	7. *Sudarśane*	10. *Sudarśane*		15.			
Sunetra	善眼	6. *Sunetre*	8. *Sunetre*	11. *Sunetre*		10.	(*x*+2.)		13.
Dhṛtarāṣṭra	護世	7. *Dhṛdhirāṣṭre*	9. *Dhṛtirāṣṭre*	12. *Dhṛtirāṣṭre*		16.	5.	5.	
第二阿僧企耶									
Dīpaṅkara	燃灯	9. *Dīpaṅkare*	11. *Divaṅgare*	9. *Dipaṅkar*			2.		7.
?[6]	有相	10. *Prabhaṅkare*	12. *Prabhaṅgare*				3.	1.	
Tamonuda	住修	11. *Tamonute*	13. *Tamonute*			11.			2.
Siṃha	超師子	12. *Siṃhe*	14. *Siṃhe*						5.
Kṣemaṅkara	安隱日	(8. **Kṣemaṅgare*[3])	(10. *Kṣemaṅgare*[3])			(13.)	(1.)		
Narendra?[7]	梵志	13. *Mahendre*	15. *Mahentre*			14.			1.

Narendra?[7]	梵志	13. *Mahendre*	15. *Mahentre*			14.			1.
Śikhin	尸棄								
?[8]	二十五佛								
Śikhin	尸棄								3.
**Ṣaṭ jinās*[9]	七佛								6.
Śikhin	尸棄								
Aniruddha	歡喜	14. *Aniruddhe*	16. *Aniruddhe*			9.		4.	
Sunetra	善眼						(*x*+2.)		8.
Sujāta	善生	15. *Sūjāte*	17. *Sujāte*			12.	*x*+1.		
Sumati	善意	17. *Sūmane*	19. **Sumane*[10]						
Candana	[無]								
Brahmadatta	[無]	28. *Brahmadatte*	30. *Brahmadatte*			17.			
?[11]	[無]	18. *Harīci*	20. *Harici*						
Paramārthadarśin	[無]	19. *Paramārthadarśi*	21. *Paramārtthadarśi*				(*x*.)[12]	(3.)	
Śākyamuni	釋迦								
**Uttara*[13]	高登	21. *Uttare*	23. *Uttare*						
**Atyuttama*[14]	最上	20. *Atyuttame*	22. *Atyucakāmi*[14]					2.[15]	
**Śreṣṭhin*[16]	最尊	22. *Śreṣṭi*	24. *Śreṣṭi*						
**Śamitāri*[17]	佛	23. *Śamitāri*	25. *Śamitāri*						
**Aṅgaratha*[18]	佛	24. *Aṅgirathe*[18]	26. *Aṅkīrase*			19.[18]			14.
Mahābhāgīratha	賢車	25. *Bhāgīrathe*	27. *Bhāgirate*			18.			
Brahman	大梵	26. *Brahme*	28. *Brahme*						

**Brahmāyu(s)*[19]	[無]	27. *Brahmāyu*	29. *Brahmāyu*						
Candana	檀香								
**Candra*[20]	淨月	16. *Candre*[20]	18. *Cantre*[20]						
Indradamana	調帝	29. *Indradamane*[21]	31. *Indradamake*[22]						
Ratnaśaila	[無]	30. *Ratnaśaile*	32. *Ratnaśaile*						
[無]	梵尊								
[無]	帝釋								
[無]	調帝								
Sarvārthasiddha	悉達	31. *Sarvārthasādhane*[23]	33. *Sarvvārtthasādhane*[23]						
Indradhvaja	帝釋幢	32. *Indradhvaje*	34. *Indradhvaje*				4.		
第三阿僧企耶									
Kṣemaṅkara	安隱日	(8. *Kṣemaṅgare*[3])	(10. *Kṣemaṅgare*[3])			(13.)	(1.)		
Pūrṇamanoratha	佛								15.
Sarvābhibhū	悉供	33. *Sarvābhibhu*	35. *Sarvvārthasiddhe*						
Ratnaśikhin	寶髻	34. *Ratnadhuri*[24]	36. *Ratnacuri*[24]						
Padmottara	上蓮花	35. *Padmottare*	37. *Patmottare*						
Yaśottara	上稱	36. *Yaśottare*	38. *Yaśottare*			8.			
Suvadana[25]	勝論	37. *Suvādi*	39. *Suvādi*						
Vimala	無垢	38. *Vimale*	40 *Vimale*						
Prabodhana	合覺	39. *Prabodhane*	41. *Prabodhane*						
Jitaśatru[26]	修行	40. *Jitāri*	42. **Jitāri*[27]						
Vāsiṣṭha	淨住	41. *Vāsiṣṭhe*							11.

Jyotiṣprabha	相師	42. *Jotiketu*[28]							
Ketu	繫都	43. *Ṛṣabhe*							
Bhāradvāja	捨重	44. *Bharadvāje*							
Arthadarśin	見義	46. *Arthadarśi*				7.	(*x*.)[12]		
?[29]	諸兵義								
Paramārthadarśin	他利見						(*x*.)[12]	(3.)	
		47. *Viraje*							
Tiṣya	底沙	48. *Tiṣye*							
Tiṣya	晨宿	49. *Puṣye*[30]							
Vipaśyin	毘婆尸	50. *Vipaśyi*							
Śikhin	尸棄	51. *Śikhī*							
Viśvabhū	毘婆尸	52. *Viśvabhu*							
kakutsunda	留村陀	53. *Krakasundi*							
Kanakamuni	迦耶迦牟尼	54. **Kanakamuni*[31]							
Kāśyapa	迦葉	55. **Kāśyape*			B401		*x*+3.		10.
Śākyamuni[32]	[無]	56. **Śākyamuni*							
Maitreya	彌勒								

參考文獻

Bailey, H. W. (1946) Gāndhārī. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 11-4: 764-797.

Bailey, H. W. (1951) *Khotanese Buddhist texts*. London, Taylor's Foreign Press.

Bailey, H. W. (1981) *Khotanese Buddhist texts. Revised edition*. Cambridge, Cambridge University Press.

Catalogue = Skjærvø, P. O. (2003) *Khotanese manuscripts from Chinese Turkestan in the British Library: A complete catalogue with texts and translations* (Reprinted with corrections). London: British Library.

慶昭蓉 (2013) 「龜茲石窟現存題記中的龜茲國王」『敦煌吐魯番研究』第十三卷: 387-418.

Ehlers, G. (1982) Ein alttürkisches Fragment zur Erzählung vom Töpfer. *Ural-Altaische Jahrbücher*, Neue Folge 2: 175-185.

Emmerick, R. E. (1978) Review for Takubo (1975). *Indo-Iranian Journal* 20: 253-256.

井ノ口泰淳 (1960) 「ウテン語佛名經について」『印度學佛教學研究』8-2: 616-619.

橘堂晃一 (2013) 「ウイグル佛教におけるベゼクリク第20窟の歴史的意義」In: 龍谷大學アジア佛教文化研究センター (編)『トゥルファンの佛教と美術—ウイグル佛教を中心に—: シルクロードの佛教文化—ガンダーラ・クチャ・トゥルファン—第2部 (2012年度第1回國際シンポジウムプロシーディングズ)』京都: 龍谷大學, 141-168.

Konczak, Ines (2013) Origin, development and meaning of the Praṇidhi paintings on the Northern Silk Road. In: 龍谷大學アジア佛教文化研究センター (編)『トゥルファンの佛教と美術——ウイグル佛教を中心に——: シルクロードの佛教文化——ガンダーラ・クチャ・トゥルファン——第2部 (2012年度第1回國際シンポジウムプロシーディングズ)』京都: 龍谷大學, 43-75.

Le Coq, A. von (1913) *Chotscho: Facsimile-Wiedergaben der wichtigeren Funde der ersten königlich preussischen Expedition nach Turfan in Ost-Turkistan*. Im Auftrage der Generalverwaltung der königlichen Museen aus mitteln des Baessler-Institutes. Berlin: D. Reimer.

寥暘 (2012) 『克孜爾石窟壁畫年代學研究』北京: 社會科學文獻出版社.

Maggi, Mauro (2009) Khotanese literature. In: R. E. Emmerick et al. (eds.) *The literature of pre-Islamic Iran: Companion volume I to A history of Persian literature*. New York: I.B.Tauris, 330-417.

Malzahn, Melanie (2007) The most archaic manuscripts of Tocharian B and the varieties of the Tocharian B language. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta tocharica*. Heidelberg: Winter, 255-297.

森美智代 (2015) 「龜茲石窟の "立佛の列像" と誓願圖について」『佛教藝術』340號: 9-36.

村上眞完 (1984) 『西域の佛教: ベゼクリク誓願畫考』東京: 第三文明社.

中川原育子 (1994) 「キジル第 110 窟 (階段窟) の佛傳圖について」『密教圖像』13: 19-38.

荻原裕敏 (2013) 「略論龜茲石窟現存古代期龜茲語題記」『敦煌吐魯番研究』第十三卷: 371-386.

Ogihara Hirotoshi (2014a) Fragments of secular documents in Tocharian A. *Tocharian and Indo-European Studies* 15: 103-129.

荻原裕敏 (2014b) 「吐火羅語文獻所見佛名系列——以出土佛典與庫木吐喇窟群區第 34 窟榜題爲例」『西域文史』第九輯: 33-49.

荻原裕敏 (2015a) 「試論庫木吐喇第 50 窟主室正壁佛龕千佛圖像的程序」『西域研究』2015-3: 36-42.

荻原裕敏 (2015b) 「俄國國立艾爾米塔什博物館所藏庫車、錫克沁壁畫題記」『西域文史』第十輯: 33-42.

荻原裕敏 (2016a) 「『根本說一切有部律藥事』に關連する二點のトカラ語 B 斷片について」荒川正晴・柴田幹夫編『シルクロードと近代日本の邂逅：西域古代資料と日本近代佛教』東京: 勉誠出版, 258-276.

荻原裕敏 (2016b) 「ベゼクリク第 20 窟誓願圖のトカラ語題記について」『東京大學言語學論集』37: 191-216.

荻原裕敏 (2016c) 「ドイツ所藏トカラ語 B 斷片 B384 について」『東京大學言語學論集』37 (e-TULIP): 69-79.

Peyrot, M. (2008) *Variation and change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.

榮新江 (2015) 「近年對龜茲石窟題記的調查與相關研究」『西域研究』2015-3: 1-9.

Sander, Lore (1968) *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. Wiesbaden: Franz Steiner.

Sander, Lore (2005) Remarks on the formal Brāhmī script from the Southern Silk Route. *Bulletin of the Asia Institute*, volume 19, 2005[2009], pp. 133-144.

Schmidt, K. T. (2008) Westtocharische Übersetzung zu den Praṇidhibildern der Ritterhöhle in Kiriš. In: Brigitte Huber et al. (eds.) *Chomolangma, Demawend und Kasbek: Festschrift für Roland Bielmeier zu seinem 65*. Geburtstag. Halle (Saale): International Institute for Tibetan and Buddhist Studies, 513-524.

SHT III = *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Teil 3. Wiesbaden, Franz Steiner, 1971.

末森薫 (2016) 「敦煌莫高窟早期窟千佛圖の規則的描寫法 : 第二五四窟の空間設計における千佛圖の機能」『佛教藝術』347: 9-37.

T. = 『大正新修大藏經』

田久保周譽 (1975) 『燉煌出土于闐語祕密經典集の研究』東京: 春秋社.

TochSprR(B) II = Sieg, E. and W. Siegling (1953) *Tocharische Sprachreste. Sprache B*. Heft 2. Fragment Nr. 71 — 633. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Weller, F. (1928) *Tausend Buddhanamen des Bhadrakalpa: Nach einer fünfsprachigen Polyglotte*. Leipzig: Verlag des Asia Major.

新疆維吾爾自治區博物館・新疆人民出版社 (1997) 『新疆石窟: 庫車庫木吐拉石窟』上海: 上海人民美術.

新疆維吾爾自治區文物管理委員會・庫車縣文物保管所・北京大學考古系 (1992) 『中國石窟 庫木吐拉石窟』北京: 文物出版社.

新疆龜茲石窟研究所 (2008a) 『庫木吐喇石窟內容總錄』北京: 文物出版社.

新疆龜茲石窟研究所 (2008b) 『森木塞姆石窟內容總錄』北京: 文物出版社.

新疆龜茲研究院・北京大學中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歷史語言研究所 (2014a) 「庫木吐喇窟群區第 34 窟現存龜茲語壁畫榜題簡報」『西域文史』第九輯: 1-32.

新疆龜茲研究院・北京大學歷史系中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歷史語言研究所 (2014b) 「瑪扎伯哈與森木塞姆石窟現存龜茲語及其他婆羅謎文字題記內容簡報」『西域歷史語言研究集刊』第七輯: 45-61.

新疆龜茲研究院・北京大學歷史系中國古代史研究中心・中國人民大學國學院西域歷史語言研究所 (2015) 「新疆庫木吐喇窟群區第 50 窟主室正壁龕內題記」『西域研究』2015-3: 16-35.

八尾史 (2013) 『根本說一切有部律藥事』東京: 連合出版.

中國壁畫全集編輯委員會編 (1995) 『中國新疆壁畫全集 4 庫木吐拉』烏魯木齊: 新疆美術攝影出版社.

（作者は京都大學白眉センター・文學研究科特定准教授）